アブドゥッラー・フサインのペナン時代（1939年〜1941年）
英領期マラヤの結社と出版

西 芳実

1. はじめに――『ある旅路』「人生いろいろ」を読む

本稿は、マレーシアの国民的文学者アブドゥッラー・フサイン（Abdullah Hussain）の自伝『ある旅路』（Sebuah Perjalanan）のうち、1930年代末から1940年代初めまでの時期を描いた章「人生いろいろ」（Ragam Hidup）を取り上げ、当時の時代背景の中にアブドゥッラーの遍歴を位置付ける。

本稿はアブドゥッラーの子ども時代を整理した［西 2020］の続きにあたる。アブドゥッラーの位置づけや経歴については［西 2020］を参照していただきたい。また、本稿は、20世紀前半のマレー世界における出版や執筆を通じた人々の交流およびそれを通じた思想の流通についての研究の一部であり、アブドゥッラーの人生遍歴に関わる人物名をなるべく多く記載するように心がけている。言及される人物については可能な限り経歴等を記載しているが、［西 2020］で紹介済みの人物などについては本稿では説明を省略しているものがある[1)]。

本稿が扱うのは、1930年代末にマレー人の定義をめぐる論争が始まったことで、マレー語出版界に亀裂が生じ始め、アラブ系やインド系のマレー語知識人がけん引してきたペナンの出版界にもその影響が及び始めていた時期にあたる。アブドゥッラーはペナンの出版・広告業界に出入りして、編集や出版の仕事の見習いをしながら、それまで新聞・雑誌の記事や著作を通じて知るだけだった文筆家たちと直接交流するようになった。また、ペナンを中心とするマラヤ北部地域を出て、ベントン（パハン州）、クアラルンプール、シンガポールにも足を延ばした。

1）本稿で登場する人物の名前は初出時にローマ字表記を記している。尊称はアブドゥッラーの著作の記述にしたがって記載する。ただし日本語の表記では、生まれながらに得ているもの以外の尊称は除外した。

2. パハンからペナンへ

ベントンのスズ鉱山で事務補佐員をしていたアブドゥッラーがパハンからペナンに移ったのは、ペンフレンド同盟が断食月明けの会員集会を1939年11月14日に開催することを『サハバット』（Sahabat、「友」）で読んだことがきっかけだった。

『サハバット』は1939年２月にペナンで創刊された。週３回刊行されるジャウィ新聞で、ペンフレンド同盟の機関紙ともいえる新聞だった。アブドゥッラーはベントンに来る前に会員になっており、『サハバット』に投稿した小説「村の娘」が採用されて1939年８月末から連載が始まっていた。

アブドゥッラーはスズ鉱山の仕事をやめ、バスと鉄道を乗り継いでペナンに向かった。クアラルンプールからペナンへ向かう鉄道には、ペンフレンド同盟のバッジをつけた会員が次々と乗り込んできた[2)]。文通を通じて知り合っていた友人たちの出迎えを受け、アブドゥッラーがかねてよりあこがれていた『サハバット』の主筆のアフマド・ヌル・アブドゥル・シュクル（Ahmad Noor Abdul Shukoor、以下アフマド・ヌル）に会った。集会ではアフマド・ヌルが作曲した同盟歌「目覚めよ！」が歌われた。アブドゥッラーはベントンで作った詩「祖国を愛せ」を読んで挨拶の言葉とした。アブドゥッラーとアフマド・ヌルの面会時の写真やアブドゥッラーの詩が『サハバット』に掲載された[3)]。

この集会をきっかけにアブドゥッラーはペナンのペンフレンド同盟の関係者と親しくなり、彼らの家[4)]に寄宿しながら『サハバット』編集部に足しげく通う

2）バトゥガジャやクアラカンサル。クアラカンサルのアラビア語学校の学生が多かった。

3）アブドゥッラーはS. M. Zainal Abidinに会うことを期待していた。ペンフレンド同盟の中核メンバーで、RAJDAP、すなわちタバコ（rokok）、酒（arak）、賭け事（judi）、ダンス（dansing）、買春（pelacuran）を遠ざけるべしと呼びかけた人だった。

4）病院勤務のハシム、監獄勤務でインド系プラナカンのユスフなど。

うちに、アフマド・ヌルの事務補佐見習いとして『サハバット』に受け入れられた[5]。また、ペンフレンド同盟が各地で開催していた会合にアフマド・ヌルの代理として参加するようになった。

アフマド・ヌルが『サハバット』をやめてからは、アブドゥッラーはペンフレンド同盟の始まりをつくった『サウダラ』(Saudara、「兄弟」)の編集部の仕事を手伝うようになった。また、『サハバット』で働いていた友人が設立した広告会社の手伝いをしたり、雄鶏会という読書クラブ(後述)に参加したりした。

3. ペナンのペンフレンド同盟と『サウダラ』、『サハバット』

アブドゥッラーをペナンに引き寄せたペンフレンド同盟は、1928年にペナンで創刊された『サウダラ』[6]のペンフレンド欄から発展して1934年4月に発足した[7]。1934年11月に最初の全国大会がタイピンで開かれ、1935年5月にはマラヤ全域とボルネオに支部を広げた。クアラルンプールやペナンで全国大会が開かれ、1937年半ばに会員数が一万人を超えるまでに拡大したが、会員数の増大とともに州ごとの活動の独自性を求める声が大きくなり、1938年半ば以降に分裂して活動が停滞していった[8]。

1938年2月にペンフレンド同盟のペナンの中心メンバーによって『サハバット』が創刊された[9]。アブドゥッラーがペンフレンド同盟に参加して記事を寄稿していたのはこの『サハバット』である。集会を企画することで文通欄のみで知り合っていた会員どうしが直接会う機会を増やし、北部マラヤにいる会員の交流を促進しているところだった。

北部マラヤを中心にマラヤ全域で読まれていた『サウダラ』は、1939年5月29日にシンガポールで創刊された『ウトゥサン・ムラユ』によって、「真正のマレー人」ではない人々が経営していて「インド系の舌」を持つとの批判を受けていた。当時『サハバット』に出入りしていたアブドゥッラーは経営者や編集者について次のように記している。

> 経営者の1人であるシェイク・アブドゥッラー・アルマグリビ(Syeikh Abdullah al-Magribi)はアラブ系でマレー語がうまかった。ペナンのカウム・ムダの拠点として知られていた宗教学校マドラサ・アルフダを率いていた。彼は第二次世界大戦後にメッカに帰った。ほかにイブラヒム・アキビ(Tuan Haji Ibrahim Aqiby)もいた。彼の家には宗教書がたくさんあり、誰よりも多く読書していると評判だった。彼もカウム・ムダで、敵対するカウム・トゥアたちからは華人系だと揶揄されていた[10]。[Abdullah 1985: 274-275]

『サハバット』の刊行責任者だったアブドゥル・ア

5) 活字を読んだりペンフレンド・コーナーの記事を書いたりするように誘われたのが始まりで、やがてアフマド・ヌルの非正規の助手になった。給与はなかった。

6) 1928〜1941年にペナンで刊行された。創刊当時は週刊で、1932年に週2回刊行になった。発行部数1,500部のペナン最大規模の新聞で、マラヤ北部で最も影響力があった[Hamedi 2015: 49-51]。創刊者はサイド・シェイク・アルハディ(Syed Syeikh bin Ahmad bin Hasan bin Saqaf al-Hadi、1867年ムラカ生まれ、通称Syed Syeikh al-Hadi)である。サイド・シェイク・アルハディはビジネスや宗教教師をしながらシンガポールでイスラム近代主義の雑誌『アル・イフワン』(Al Ikhwan、「同胞」)を創刊した。1916年ごろにペナンに拠点を移し、小説『ヒカヤット・ファリダ・ハヌム』の収益や友人の支援などを元手にジュルトン出版社を設立し、1926年にペナンで『アル・イマーム』(Al Imam)を創刊した。宗教関連の記事が多かった『アル・イマーム』に対して、『サウダラ』は「多くのコミュニティに同胞と友愛を求める」という目標を掲げ、一般的な社会問題を多く取り上げてマラヤのマレー人読者に開かれた紙面づくりをめざした。創刊時の刊行責任者は息子のサイド・アルウィ、編集責任者はモハンマド・ユヌス・アブドゥル・ハミド(Muhammad Yunus Abdul Hamid)だった。サイド・シェイク・アルハディについて詳しくは[Hooker 2000: 389-391; Siti 2009: 50-61]を参照。『サウダラ』の発行部数は1931年で1,500部、読者は1930年時点でマラヤ、サラワク、サバ、シャム、インドネシア、カリマンタン、南タイ、ジャワ、ラブアン、スマトラ、スラウェシ、エジプト、サウジアラビア、ロンドンにいた。

7) 1934年2月もしくは6月にサイド・シェイク・アルハディが死去した。シンガポール時代からの盟友で『アル・イマーム』をともに創刊したシェイク・タヒル・ジャラルディンが1934年3月から9月まで『サウダラ』の編集を担った。シェイク・タヒル・ジャラルディンのもとで読者が意見交換するコーナーを設けて活動を活発化させることになり、アフマド・カティブ(Ahmad Khatib)が担当する「子どもの園」(Halaman Kanak-kanak)欄が開設された。1934年4月15日に「子どもの園」欄を拡張して、ペンフレンド(sahabat pena)のためのスペースが広げられた。1934年9月29日に「子どもの園」欄は終了し、1934年10月3日から「ペンフレンドの園」欄が新たに設けられた。この間、シンガポールで別の仕事をしていた息子のサイド・アルウィが1934年7月にペナンに戻って『サウダラ』の編集者になり、また、創刊時の編集者で一時期『サウダラ』を離れていたモハンマド・ユヌスも『サウダラ』に戻ってきた[Siti 2009]。

8) ペンフレンド同盟の概要や意義については[Roff 1994: 212-221; Ariffin 1993: 19; 山本 2006: 203]を参照。

9) ペンフレンド同盟の主要メンバーが経営するサハバット社の傘下にあったアルフダ出版社によって週3回刊行された。アルフダ出版社は『ブミプトラ』(Bumiputera、「土地の子」、1933年1月創刊)を刊行していたコマーシャル出版社をシェイク・アブドゥッラー・アルマグリビが引き継いで設立した。創刊時の刊行責任者はサイド・アフマド・シェイクで、1940年からは『ブミプトラ』を率いていたアブドゥル・アジズに変わった。モハンマド・サミン、アフマド・ヌル、フセイン・ババといった編集者はいずれもペンフレンド同盟の会員だった。運営はサイド・アフマド・シェイク(1939年)とムハンマド・アリフ(1939-1940年)が担った[Hamedi 2015: 93-94]。1941年11月22日に停刊した。

10) なおアブドゥッラーは彼らのことを「ハディースとコーランにのみ準拠するという意味では正統派であり、カウム・トゥアと位置づけてしかるべきだった」と評価している[Abdullah 1985: 274]。

ジズ（Haji Abdul Aziz）は、『プドマン・イスラム』（Pedoman Islam、「イスラムの指針」）という宗教雑誌を刊行しており、アブドゥッラーも影響を受けていた[11]。

マレー語出版ははじめシンガポールやペナンを中心にアラブ系やインド系の資本と運営によって行われ、これに対する危機意識を持ったシンガポールのマレー人がアラブ系やインド系に対抗して『ウトゥサン・ムラユ』などの新しい新聞を創刊しており、『サハバット』に対するインド系や華人系であるとの批判はこの動きに呼応するものだった。

アブドゥッラーはペンフレンド同盟の呼びかけに誘われるようにしてペナンの『サハバット』や『サウダラ』に出入りするようになったが、この頃はペンフレンド同盟の活動が陰りを見せ始めた頃であり、北部マラヤで隆盛していた新聞・雑誌も代替わりの時期を迎えていた。

4. ペナン時代に出会った人々

アブドゥッラーがペナンでマレー語メディアに出入りしながら出会った人々の出自は多様で、アラブ系、インド系、イスラム改革派、インドネシア出身者の人々を見ることができる。とりわけ多く言及されているのはインドネシア出身者である。

(1)アブドゥッラーに仕事を教えた２人

アブドゥッラーは『サハバット』のアフマド・ヌルと『サウダラ』のムハンマド・アミン・ナヤン（Mohd. Amin Nayan）の仕事を手伝った。この２人はそれぞれインドネシア出身者[12]とインド系ムスリムである。それぞれの経歴をアブドゥッラーの記述をもとに簡単に見てみよう。

アフマド・ヌル

アフマド・ヌルは『サハバット』の事実上の編集長で、社説を書き、また、アスプロ（Aspro）[13]名による「コピ・パヒット」（Kopi Pahit、「苦いコーヒー」）欄とマット兄さん（Abang Mat）名による「ペンフレンド同盟の便り」（Perkhabaran Paspam）欄を担当していた[14]。連載や短編も執筆し、国内外の政治動静の記事も書いた。

アフマド・ヌルは『サハバット』の編集者になる前にペラ州のイポーで縫物屋を開いていた。屋号は「ビリック・ビル」（Bilik Biru、「青い部屋」）で、のちに彼は「青い部屋の秘密」というロマン小説を書いた。

『ワルタ・ペラ』（Warta Perak、「ペラの報せ」、月３回刊行、1937年３月13日創刊）の編集を担当したこともあったが、同紙は６ヵ月で停刊となった。また、『シナル・マラヤ』（Sinar Malaya、「マラヤの光」、1931年創刊）の編集も担当した。

アフマド・ヌルはスマトラ出身で、1921年のデリ鉄道ストライキ事件の後にマラヤに逃げてきた。スマトラでは鉄道労働者のリーダーの１人として『アピ』（Api、「火」）という雑誌を担当していた。アフマド・ヌルはマラヤでの名前で、本名はハラルッディン・ハムザ（Halaloeddin Hamzah）だった。日本軍が敗退してイギリス軍が戻ってくると、マラヤ・ムラユ民族党（Parti Kebangsxaan Melayu Malaya）で党執行部員（ahli jawatankuasa）になり、ペナンで『スンボヤン・バル』（Semboyan Baru、「新しい旗印」）という雑誌を刊行した際にはハラルッディン・ハムザ名を用いた。

ムハンマド・アミン

ムハンマド・アミンはアブドゥッラーがペナンにいた時期に『サウダラ』の編集長を務めた[15]。ムハンマド・アミンはペナン生まれのインド系で、改宗したムスリムだった。メダンでジャーナリズムを学び、マレー人の生活にかかわる問題だけでなく、州の行政を批判する記事も書いた。現場での観察を踏まえた記事を通じて批判や提案を行い、高い批評性を持つ書き手として知られた。

ムハンマド・アミンはいつも蝶ネクタイをしていることで知られた。アブドゥッラーは1940年から『サ

11）これらの経営陣は、週３回の刊行にあわせて事務所に姿を現した。

12）インドネシアで生まれた人またはその子孫で、シンガポールやマラヤで「インドネシア人」とみなされている人を、本稿ではシンガポールやマラヤの国籍を持つ人も含めてインドネシア出身者と呼ぶ。

13）詳細は不明。当時の頭痛薬の名前か。

14）このほかにAdnan Al-Fikriという筆名も使っていた。「コピ・パヒット」はこの新聞の人気記事だった。アフマド・ヌルのもと、『サハバット』はペンフレンド同盟の集う場として、マラヤ全域とボルネオのマレー語著述家やマレー語愛好者たちの関心を集めた［Hamedi 2015：95］。

15）1939年から1941年２月28日の停刊まで［Hamedi 2015：50］。それ以前はオスマン・カラム（Othman Kalam）が去った後の1933年から1936年ごろに『ブミプトラ』の編集を担当していた。『ブミプトラ』のアブ・ナワス（Abu Nawas）が担当した「サンビル・ラル」（Sambil Lalu、「垣間見」）というコーナーは、鋭く厳しいながらもユーモアを失わない批評性を持っており人気を博していたが、『ブミプトラ』を快く思わない人々のために刊行停止を余儀なくされた。

ウダラ』の編集の手伝いをするようになり、ムハンマド・アミンの助手を務めた[16]。当時の新聞は英字紙やほかの新聞から記事を転載しており、アブドゥッラーは海外記事の翻訳のしかたをムハンマド・アミンに教わった。

⑵青年たちの活動

アブドゥッラーは『サハバット』や『サウダラ』で仕事をするほかに友人たちとの活動にも参加した。

広告会社マーキュリー広告代理店

『サハバット』で一緒に働いていたムハンマド・ユヌス（Mohd. Yunoos、通称ママ・ユヌス）とザイン・ムハンマド（Zain Haji Muhammad、通称ザイン）の３人でマーキュリー広告代理店（Mercury Advertising Agency）という広告会社を立ち上げた。

アブドゥッラーが２人と知り合ったのは、仕事がない頃に『サハバット』の事務所に出入りしていたときだった、２人はそこで紙面組みをするコンポジターの仕事をしていた。ママ・ユヌスは小柄で恰幅のよい色白のインド系ムスリムで、富裕な家に住んでいた。ザインはアブドゥッラーと同様、父親がスマトラのアチェ出身者だった。２人は当時のペナンのほとんどのマレー語出版社と親しい交流があった。アブドゥッラーは、マーキュリー広告代理店でママ・ユヌスが広告を取ったり集金したりするのを手伝った[17]。

やがてママ・ユヌスは『サハバット』を辞めて広告会社の仕事に専念した。一方、ザインは様々な新聞・雑誌の出版に携わり続け、イポーの『ワルタ・キンタ』（Warta Kinta、「キンタの報せ」）[18]、シンガポールのワルタ・マラヤ社、ペナンの『パンチャラン・マタハリ』（Pancaran Matahari、「陽光」）とその後継の『ペナン新聞』（Penang Shimbun）のマレー語面の印刷を任された。

マーキュリー広告代理店はイベントも開催した。ムハンマド生誕祭[19]の一般向けイベントを屋外で大々的に開催し、数千人が集まった。アブドゥッラーは１時間の講演を行った。宗教行事のほか、ボリアのコンテストを行って優勝者にトロフィーを渡した。これ以降、『マジュリス』[20]でペナンの記事を担当していたアブドゥル・ハミド（Abdul Hamid Abdul Aziz）はアブドゥッラーたちに冷淡な態度をとるようになった。クダに帰らないなら殴るといわんばかりの勢いだったという。アブドゥッラーはシンガポールに行くかクダに帰るかしようと考え始めた。

読書クラブ雄鶏会（Mundung Parti）と海峡植民地マレー人連盟

寄宿していた家の近くにメダン華人の大きなバンガローがあり、そのお抱え運転手のアブ・バカル・スタン（Abu Bakar Sutan）がバンガロー内に部屋を１つ持っていた。その部屋を読書室として、アブ・バカル・スタンを会長とする読書クラブの雄鶏会（ムンドゥン会）が結成され、アブドゥッラーも参加した。

メンバーには出版社で働いていたアブドゥッラー・アフマド（Abdullah Ahmad）[21]がいて、出版社を通じて無料で手に入る本をすべて会に提供した。アブ・バカル・スタンも新聞と雑誌を提供した。それらの中にはインドネシアの新聞や雑誌も多く含まれていた。

シンガポールのマレー人連盟のメンバーが中心になって刊行されていたウトゥサン・ムラユ社の新聞『ウトゥサン・ムラユ』[22]は「ムラユ・ジャティ」（Melayu Jati、「真正なるマレー人」）の民族精神を鼓舞していた。雄鶏会のメンバーはそれらの記事を読んではよく議論した。

1938年にマレー人青年連盟（Kesatuan Melayu Muda）が設立されると、ペナンに支部はなかったが、雄鶏会のメンバーはみなすでにそのメンバーになった気分でいた。イスハク・ムハンマド（Ishak Haji Muhammad）[23]の短編「ドリー、上海の天使」（Dolly, Bidadari dari Shanghai）に登場する「祖国と財産を

16）給与は一か月４リンギで、週ごとに分割して支払われたが給与の遅配が常態化していた。また、モハマド・アミンはペナン義勇軍に参加しており、昼間はその訓練に行っていて事務所にいないことが多かった。

17）ペナン・バザールで布を売っていたSyeikh Omar Bassereeが常連だった。

18）1937年12月24日創刊。イポーで最初の地方新聞だった。創刊にあたり、ラジャ・マンスールは妻の父でマレー鉱山会社を経営するラジャ・アブドゥッラー（Raja Abdullah bin Raja Syed Salim）から資金提供を受けた。

19）1940年4月か1941年3月のいずれかと思われる。

20）クアラルンプールで最初のジャウィ新聞。1931年12月17日創刊。1939年には日刊になっていた。

21）1909年にシンガポールで『ウトゥサン・ムラユ』（～1921年）を創刊し、1926年にシンガポール・マレー人連盟を結成したマレー人指導者モハンマド・ユーノス・アブドゥッラー（Mohd. Eunos Abdullah）の甥だった。

22）モハンマド・ユーノス・アブドゥッラーが創刊した『ウトゥサン・ムラユ』とは別で、1939年に創刊された。

23）1909年パハン生まれ。1937年に『ワルタ・マラヤ』に記事を書くようになり、1939年には『ウトゥサン・ムラユ』で働くようになる。マレー人青年連盟にも参加した。第二次世界大戦終了後は、ブルハヌッディン・アルヘルミとともにマラヤ・ムラユ民族党の設立に加わった。

償還する」(menebus tanah air dan harta benda) という言葉を自分たちで勝手に省略してmatahabと呼んで気に入っていた。また、「私たちはこの地でよそものではない」(Kita di sini bukan orang dagang) という短編は、ムラユ・ラヤ (Melayu Raya、大マラヤ) を理想とする若者の一人として強い印象を受けた。イスハク・ムハンマドはアブドゥッラーたちのヒーローだった。『タハン山の王子』(Putera Gunung Tahan) をはじめとする作品にも感銘を受けた。仲間たちの間で民族精神 (semangat kebangsaan) が高まり、外国人が経営する飲食店で飲み食いしないことが流行になるまでになっていた。

1939年末に海峡植民地マレー人連盟 (Kesatuan Melayu Negeri-negeri Selat) のペナン支部が結成されると、雄鶏会のメンバーはみな同連盟に入会申請を行った。アブドゥッラーも入会した。海峡植民地マレー人連盟は、ジャウィ・プラナカンを主なメンバーとするペナン・マレー人協会 (Persatuan Melayu Pulau Pinang、PEMENANG)[24] に対抗して結成されたものだった。事務局長は『マジュリス』でペナンの記事を担当していたアブドゥル・ハミドで、アブドゥッラーは会費徴収を担当した[25]。毎週自転車で会費を集金してまわり、徴収した金額の1割を手数料として受け取った。ペナン支部はイベントを開催して奨学金を集め、ペナン・フリースクールの卒業生に奨学金を与えてシンガポールの大学で医学を学ばせた[26]。

しかし、アブドゥッラーは『サウダラ』で働いていることを理由に海峡植民地マレー人連盟を除籍された。『サウダラ』は「真正のマレー人ではないマレー人」の手に渡っているとみなされていた。アブドゥッラーがペナンで開催されたマラヤ・マレー人記者協会 (Persatuan Wartawan Melayu Malaya、PUMAS) の設立集会に参加していたことも問題とされた。PUMASはアラブ系のサイド・フサイン・アルサゴフ (Syed Hussain Alsagoff) の新聞『ワルタ・マラヤ』の提案で設立されたもので、真正なるマレー人のメディアを自任する『ウトゥサン・ムラユ』の呼びかけでクアラルンプールに設立されたマラヤ・マレー人記者同盟 (Kesatuan Wartawan Melayu Malaya、KUMAS) に対抗する存在とみなされていた[27]。

雄鶏会では、ペナンに来ていたイブラヒム・ヤアコブ (Ibrahim Yaakob) を招いて1940年8月24日に集会を開催した[28]。イブラヒム・ヤアコブから「独立！」と声をかけられると、メンバー一同は一瞬戸惑った後に「万歳」(Hidup) と応答した。アブドゥッラーは雄鶏会のメンバーとしてこの集会に参加し、インドのララ・ラージパット・ライ (Lala Lajpat Rai[29]、1865-1928年) の言葉を使って以下のように閉会の辞を述べた。

「ウンマあるいは民族の統一は、新聞や壁に貼られたポスターの中のスローガンだけで勝ち取ることはできず、真剣な行動によって得られるのです。なぜなら、それこそが真の目標と進歩を達成するための唯一の要件だからです！」

(3)インドネシア出身者との付き合い

アブドゥッラーは、インドネシア出身の著述家、運動家、芸術家たちとの交友も増えていった。小学校から中学校にかけての時期に新聞や雑誌を通じて彼らの作品に触れていたアブドゥッラーは、青年になって単身で自由に行動できるようになると、同世代の人々とのつきあいを越えて「大人たち」と交流するようになった。その多くは、インドネシアでの政治社会運動をオランダ当局に咎められ、マラヤに活動の拠点を移した人々だった。

ムハンマド・ユヌス・アブドゥル・ハミド

ムハンマド・ユヌス・アブドゥル・ハミド(Mohammad Yunus Abdul Hamid)は、1889年にスマトラのランカッ

24) 1927年に設立された。

25) 支部長は東方製錬社 (Eastern Smelting Company) の職員だったプティ・バドリ (C. M. Putih Badri) だった。

26) この時に派遣されたのはアブドゥル・マジド (Haji Abdul Majid) だった。シンガポールに出発してほどなく日本軍に占領されたため、アブドゥル・マジドは新たにシンガポールに開校された日本の医学校に通った。日本の敗戦で連合軍がシンガポールに戻るとメダンに逃げ、英語紙『フリー・インドネシア』(Free Indonesia) を編集した。メダンがオランダに占領されるとプマタン・シアンタルに移り、ナッシール内閣のもとで情報省の仕事をした。アチェのランサ出身のウラマーの娘と結婚した。オランダ語、英語、ドイツ語に長けていた。インドネシア独立革命のときには紙やインクやタバコを製造してメダンの新聞業を助けた。軍に入隊して大佐になったこともある。メダンのメソジスト学校で英語教師をしたこともあった。後にクアラルンプールに移り、UMNOの機関紙である『マラヤ・ムルデカ』(Malaya Merdeka、「独立マラヤ」) の編集を担当した。

27) アブドゥッラーによれば、KUMASの設立集会に参加したかったがクアラルンプールまで行く旅費がないために参加を断念した一方で、PUMASの設立集会はペナンで開催されていたことや、アフマド・ヌルに誘われたことからPUMASの設立集会に参加することになったものだった。

28) 場所はインドネシア料理のガドガドを売るブン・スワルディ (Bung Suwandi) の家だった。

29) アブドゥッラーはLal Ripat Paiと表記している。

トで生まれた[30]。ペナンのインドネシア協会の中心人物の1人で、アブドゥッラーはムハンマド・ユヌスを「ペナンのマレー語雑誌の出版で活躍した最初のインドネシア人」と位置づけている。1925年に創刊された週刊誌『エダラン・ザマン』(Edaran Zaman、「時代の転換」)[31]の編集を担当した。『エダラン・ザマン』の誌面は、海外報道、裁判記録、読者の意見、市場価格、広告から構成されていた。

ムハンマド・ユヌスは1930年に月刊誌の『マラヤ』(Malaya) を創刊した。『マラヤ』はマラヤのマレー語雑誌・新聞に先駆けてクロスワード・パズルを掲載したことで知られる。その後、ムハンマド・ユヌスは『サウダラ』を編集した[32]。このほかにも、『デワサ』(Dewasa、「大人」)、『プルサハバタン』(Persahabatan、「友好」) の編集を担当した。

ムハンマド・ユヌスの自宅ではインドネシアの書籍を売っており、インドネシア協会とともにペナンでインドネシアの書籍を購入できる場所だった。1939年末、ムハンマド・ユヌスはペナン・インドネシア協会の代表として第28回ムハマディヤ会議に参加するためにメダンに戻り、1945年のインドネシア独立までメダンに留まった。その後、ラブアン・ビリク(Labuan Bilik)[33]の郡長を引退するまで務めた。

ラジャ・マンスール(Raja Mansoor)

ラジャ・マンスールは、イポーで週刊誌『ワルタ・キンタ』を創刊した。ラジャ・マンスールは創刊にあたって活字を組んだり印刷したりする職人を探しにペナンを訪れた。アブドゥッラーの友人のザインら活字工たちはラジャ・マンスールとともにイポーに行って『ワルタ・キンタ』の立ち上げを手伝った[34]。

『ワルタ・キンタ』は当時のマレー語新聞の中で最も値段が安く、マラヤ北部地域で歓迎された。ラジャ・マンスールはゴラム・マイディン (Gholam Mydin) やラトゥ・マン (Ratu Man) といった筆名を用いていた。

ラジャ・マンスールはメダン出身で、マラヤに到着した当初はオランダ語の新聞『デリ・クーラント』の編集をしており、自分のことをランカットのスルタンの養子だと説明していた[35]。マラヤに着くと、スランゴール州のクランでトリオ社という印刷会社を開設した。社名のトリオ (三人組) には、自分と妻とジュラムからきたラデン・ラミン (Raden bin Lamin) の三人という意味が込められていた。毎月のように大衆小説 (ロマン・ピチサン) を印刷し、自動車に本を載せてあちこちの市に売りにでかけた。自動車によって行動範囲が広がり、自動車の中で執筆もしたという。本を売りながら各土地の名前を織り込んだ物語を執筆し、後にイポーに落ち着いた。

イブラヒム・アルワリディ

アブドゥッラーはペナン以外でもインドネシア出身者との交流があった。ペンフレンド同盟の断食月明けの集会がブキット・ムルタジャムのマレー語学校で開催され、アフマド・ヌルの代理でアブドゥッラーが参加した[36]。参加者にはアブドゥル・ムタリブ・ハニファ (Ustaz Abdul Mutalib bin Hanifah) がいた。『サハバット』によく寄稿していた人で、クダ州ヤンのカンポン・アチェにあるマドラサ・アッタルビヤトゥル・アウラディア・アルディニヤ (Madrasah Attarbiyatul Auladiah al-Diniyah)[37]で教えていた。宗教とかかわる社会問題についての記事でコーランやハディースの文言を引用するスタイルだった。アブドゥッラーは彼のファンだった。このマドラサの教師の多くはインドネシアから招かれていた[38]。

こうした活動の一環として、マレー語学校でイブラヒム・アルワリディ (Haji Ibrahim Al Walidi) を迎えて講演をしてもらったことがあった。アチェから

30) 父はスマトラ島ソロク出身のミナンカバウ人で、メッカで学びシンガポールに立ち寄った後、シアクで宗教教師となった。モハンマド・ユヌスは、ランカットの学校を卒業後、オランダの石油会社のトレーナーやデリ鉄道の電信通信指導員を経て、1916年に出版社を設立して『ブニ・ムルデカ』(Benih Merdeka、「独立の種」、1916年) や『シナル・ザマン』(Sinar Zaman、「時代の光」、1921年) を刊行した。スマトラからマラヤに渡った理由については、オランダ当局の監視が厳しくなったためとするものと、会社の経理不正が咎められたためとする説とがある。ペナンには1924年9月4日に到着した。詳しくは[Siti 2009: 62-69]を参照。

31) [Hamedi 2015: 43-54]では、1925〜1930年にペナンで週刊で刊行され、編集者と読者の投稿を除いて英語紙からの翻訳記事が誌面の多くを占めたと評価されている。1928年頃にオスマン・カラムから編集を引き継いだ。

32) モハンマド・ユヌスが『サウダラ』を辞めた後は、アブドゥル・ラヒム・カジャイがその後を継いだ。

33) 現北スマトラ州のラブアン・ビリク(Labuhan Bilik)か。

34) ただし、イポーでラジャ・マンスールが職工たちに横柄な態度をとったとして、ある晩、給与の支払いを求めると一斉にペナンに戻ったという。

35) アブドゥッラーによれば、『サハバット』でのモハンマド・サミン・タイブとの論争のなかで、ラジャ・マンスールについて知る人により、彼はかつてポクロル・バンブー (pokrol bamboo) と呼ばれる無資格の法廷弁護人だったことが明らかにされた。

36) 1940年11月頃と思われる。

37) クダで二番目に大きなマドラサ。

38) オランダのお尋ね者になっていたサイド・アブバカル・アルイドルス(Syed Abu Bakar al-Idrus)もいて、イギリス当局に毎月所在を報告しなければならなかった。

オランダに追われてきた人物で、スライマン・アフマド（Sulaiman bin Ahmad）とともにシンガポールで『ドゥニア・アヒラット』（Dunia Akhirat、「来世」）を創刊した。天国と地獄を思わせる絵を用いてイラストつきの宗教物語を掲載した最初の雑誌だった[39]。

ムハンマド・サミン・タイブ

『ワルタ・キンタ』からラジャ・マンスールが抜けた頃、アフマド・ヌルが新聞『サハバット』の経営から抜け、ムハンマド・サミン・タイブ（Mohammad Samin Thayeb）が『サハバット』を引き継いだ。

インドネシアのポンティアナック出身のベテラン編集者で、ムハンマド・ユヌスもムハンマド・サミンに師事した[40]。インドネシアの政治運動家としての経験も豊富で、スマトラのイスラム同盟を率いていた。1921年にデリで鉄道デモを指導したが、オランダ当局によって失敗に終わった。その後、pokrol bamboo（無資格の法廷弁護人）として活動したが、1930年代後半にペナンに移動した。

ペナンに着き、1939年5月にムハンマド・アミンとともにローマ字綴りを採用した月刊誌『スアラ・マレーシア』（Suara Malaysia、「マレーシアの声」）を刊行した。これはローマ字の新綴りを採用するとともに「マレーシア」をタイトルに入れるという２つの意味で最初の雑誌だったが、２号で停刊になった[41]。

ムハンマド・サミンは『サハバット』を引き継いだ時、祖国、民族、宗教を愛する精神に満ちた記事を書くだけでなく、国内外の政治情勢の解説も記した。ビジネスに関する本をローマ字で出版するという画期的な試みにも挑戦した[42]。

ガンジャマラ（Ganjamara）の筆名で連続ものの物語も執筆した。1940年10月11日に『サハバット』の紙面を2ページ使って「若者と記者」（Pemuda dan Wartawan）という記事の連載を始めた。また、「書いて頭を磨け」（Mengarang dan Mengasak Otak）というコーナーは20話まで続いた。

アフマド・ヌルが『サハバット』を辞めると、アブドゥッラーはペナンのペンフレンド同盟の会員との交流が親密でなくなった。ペンフレンド同盟の活動が停滞すると、ムハンマド・サミンはアブドゥッラーを「兵隊のいない隊長」と呼び、ペンフレンド同盟をアフマド・ヌルがいたときのように再び活性化させようと誘った。ムハンマド・サミンはこの話をアブドゥッラーとしているときにポケットから小瓶を取り出してウイスキーを一口飲んだ。アブドゥッラーは、ムハンマド・サミンが飲酒の危険性を記事に書いていながら自分は酒を飲んでいることを指摘し、言葉と行動が一致していない人とは一緒に仕事ができないと言ってムハンマド・サミンの誘いを断った。ムハンマド・サミンは、見るべきものは書いた人ではなく書かれた内容で、自分は飲酒の危険を知っているからこそ他人に助言できるのであり、自分で経験せずに人に言われたままのことを書く人よりも優れていると反論した。

日本軍がペナンに来ると船会社を設立した。タン・マラカが華人の風体でブラワンへの船を頼んだが、それがタン・マラカとわからずに断った[43]。その後アチェに渡り、ロスマウェを訪れてインドネシア共和国政府系企業のロスマウェ支部長になるが、インドネシア独立戦争中にアチェで起こった社会革命によってロスマウェで殺された[44]。

インドネシアの書籍

アブドゥッラーはペナン時代にインドネシアの書籍を読む機会が一層増した。ペナンでは、ムハンマド・ユヌスの家やインドネシア協会がインドネシアからの書籍を売る場所になっていた。雄鶏会の活動でもインドネシア語の書籍が収集された。クダに帰っ

39）イブラヒム・アルワリディは戦時中に衣料品不足を克服するために日本軍と共にアチェに戻って養蚕業を指導した。アブドゥッラーは日本軍占領期にランサでイブラヒム・アルワリディと再会する。娘の１人はシンガポールで生まれ、アブドゥッラーの友人のブスタマン・ムラユ（Boestaman Melayu）と結婚した。ブスタマン・ムラユは日本軍占領期にアチェで刊行されていた『スマンガット・ムルデカ』（Semangat Merdeka、「独立の精神」）の編集を担当し、その後、ジャカルタに移り、インドネシア共和国政府情報省に勤めた。

40）モハンマド・ユヌスとともに『独立の種』（Benih Merdeka）を創刊した。モハンマド・サミンは事業のためポンティアナックに戻らざるをえなくなり、新聞は1919年にモハンマド・ユヌスが引き継いだ［Siti 2009：63］。

41）ローマ字を採用した最初のマレー語雑誌は、従来は日本軍占領下でザイナル・アビディン・アフマド（Zainal Abidin Ahmad）が刊行した『ファジャール・アジア』（Fajar Asia、「アジアの夜明け」）とされてきた。なお、ザイナル・アビディン・アフマドは第二次世界大戦の前にメダンで活動しており、メダンで『パンジ・イスラム』（Pandji Islam、「イスラムの旗」）を刊行していた。

42）［Reid 1979：99］では、モハンマド・サミンは『サハバット』を設立したとされている。

43）この経緯はタン・マラカの『牢獄から牢獄へ』（第2巻）に記されている［タン・マラカ 1981：246］。［Reid 1979：99］によれば、モハンマド・サミンは1942年にタン・マラカと同じ船でメダンに戻った。

44）［Reid 1979：99］によれば、ロスマウェでモハンマド・サミンはイスラム同盟での知己だった地元首長と親しくしていたことから、社会革命で他の首長層が殺害された際にムハンマド・サミンも殺されたという。

たときには、ヤンのアブドゥル・ムタリブのところでインドネシアの雑誌を読んでいた。バンドン・イスラム協会（Persatuan Islam Bandung、Persis）の『プンベラ・イスラム』（Pembela Islam、「イスラムの守り手」）やその後継誌である『アル・リサン』（Al-Lisan、「舌」）を読んだ[45]。

インドネシア語の小説（buku cerita）はプスタカ・チュルダス社が刊行する『ルキサン・プジャンガ』（Leokisan Poedjangga、「詩人のスケッチ」）のシリーズがほとんどだった。『ルキサン・プジャンガ』は、ユスフ・スユブ（Joesoef Sjoe'jb）が運営していた。ほかにマトゥ・モナ[46]が運営する『チェンデラワシ』（Tjenderawasih、「極楽鳥」）もあった。マトゥ・モナは、実在の運動家タン・マラカを主人公にした冒険譚『諜報機関――インドネシアの紅はこべ』（Spinoist Dienst, Rol Patjar Merah Indnoesia）や歴史小説『輝く時代』（Zaman Gemilang）で知られていた[47]。アブドゥッラーはこれらのインドネシアの小説に強く心惹かれた。

ユスフ・スユブの小説では探偵小説『メダンの金の鷲』（Elang Emas di Kota Medan）が人気だった。小説『痛み』（Derita）は、アブドゥッラーが三作目の小説『ジャーナリスト・ルスタムの生涯』（Riwayat Rustam Journalist）を執筆する支えになった。

アブドゥッラーはインドネシアのロマン・ピチサンに触れるようになった。詩的な言い回しが特徴のムラユ・スクマ（Merajoe Soekma）、ミステリーを多く執筆していたダムフリ（A. Damhoeri）[48]、闘争と哲学がテーマのスラパティ（Soerapati、M. S. Oemar）などの著作である。当時、書籍や雑誌の出版においてメダンはジャカルタより活況を呈しており、ザイナル・アビディン・アフマド（Zainal Abidin Ahmad）率いる雑誌『パンジ・イスラム』や、ハムカ率いる『ブドマン・マシャラカット』（Pedoman Masjarakat、「社会の指針」）がよく知られていた。なかでもアブドゥッラーが愛読していたのはメダンでムハンマド・サイド（Mohd. Saidt）が刊行していた『プニュダル』（Penjedar、「覚醒者」）と『スルアン・キタ』（Seroen Kita）だった。アチェについての記事が多く、それらの記事の執筆者だったアチェエル（Atjeher、H.M. Zainuddinの筆名）、ジョハン・アフマド（Djohan Ahmad）、プトゥア・フシン（Peutoea Hoesin）とは親しい知り合いのような気持ちになっていた。

アブドゥッラーは木陰に座ってインドネシアの書籍や小説を読むのが常だった。アリ・ハシュミ（Aly Hasjmy）やイスマイル・ヤクブ（Ismail Jacoeb）、ザイヌッディン（H. M. Zainuddin）といったアチェの作家たちや、マトゥ・モナ、ユスフ・スユブ、ハムカといった作家たちに会いたいと考えていた。

5. ペンフレンド同盟の変容

(1)マレー人の定義をめぐる論争

アブドゥル・ラヒム・カジャイ（Abdul Rahim Kajai）の『ウトゥサン・ムラユ』（Utusan Melayu、「ムラユの使者」）[49]と『サウダラ』はマレー人の定義をめぐって論争を行った[50]。『サウダラ』を担ってきたのはインド系であり、『ウトゥサン・ムラユ』からDKK（Darah Keturunan Keling、インド系）と呼ばれた「真正なマレー人ではないマレー人」である。『ウトゥサン・ムラユ』は、『サウダラ』を「インド系の舌」と論評して攻撃した。ラジャ・マンスールは、純粋マレー人を主張する人々からインド系に向けられる攻撃に屈しないようにと『サウダラ』とムハンマド・アミンを励ましていた。

『ウトゥサン・ムラユ』はムハンマド・アミン、ラジャ・マンスール、アブドゥッラーを揶揄するマンガを掲載した。アブドゥル・ラヒム・カジャイが「非真正マレー人」のゴールにボールを蹴り入れようとしているのを3人が守っているという絵だった。

(2)ペンフレンド同盟の変容

アフマド・ヌルは、1940年ごろに『サハバット』を辞め、ペナンからイポーに移り、1940年11月初めごろから『ワルタ・キンタ』（ラジャ・マンスールが抜けてアブドゥル・ラフマンが編集を担当していた）に移った。

45）当時クダではバンドン・イスラム協会の刊行物は禁止されていた。

46）1910年メダン生まれ。本名はハスブラ・パリンドゥリ（Hasbullah Parinduri）。筆名はマンデイリン語の「新しく始める者」（Yang Baru Mulai）を意味する。アブドゥッラーによればイポーの英華学校に通っていたとするが、他の資料では確認できていない。

47）アブドゥッラーはこれ以外のマトゥ・モナの作品として怪奇小説『ジャ・オムネック』（Dja Omenek）の名前を挙げている。

48）アブドゥッラーはA. Damanhoeriと記している。

49）1939年5月29日にシンガポールで創刊された。ユスフ・イスハクらシンガポール・マレー人連盟のメンバーが中心になって刊行された。編集には『ワルタ・マラヤ』のアブドゥル・ラヒム・カジャイを招いた。

50）同時期に『サウダラ』と『サハバット』も論争していた。アブドゥッラーは編集者であるモハマド・アミンとムハンマド・サミンの間に個人的な問題があったと分析している。

アフマド・ヌルは『ワルタ・キンタ』でペンフレンド同盟の活動場所をつくろうとしたが、成功しなかった。アブドゥッラーはそれを『サウダラ』で試みたが、『サハバット』ほど人を惹きつける力がないために実現しなかった。『サハバット』でペンフレンド同盟を立て直そうというムハンマド・サミンの提案もアブドゥッラーは断った。

『ワルタ・キンタ』にアフマド・ヌルが入ると、ザインも『ワルタ・キンタ』に戻って出版を手伝った。アブドゥッラーも仕事を求めてイポーに行ったが、アフマド・ヌルの忙しそうな様子を見て声をかけそびれ、そのときアブドゥル・ラフマンの姿を見た。

アブドゥッラーがイポーに滞在して1週間ほど経ったころ、ザインからシンガポール行きを誘われた。ザインは『ワルタ・マラヤ』の編集補佐をしているイブラヒム・マフムド(Ibrahim Mahmud)[51]から紙面組みを手伝わないかと誘われていた。ザインとアブドゥッラーはクアラルンプールに出発した。

クアラルンプールではザインの知り合いのアラブ人の家に宿泊した。仕事を探して『マジュリス』の事務所も訪れた。クダから記事を送ってくれれば採用されるかもしれないと言われ、その例としてアブドゥル・ハミドの名前を挙げられ、アブドゥッラーはそれ以上話を進める気分を失った。

(3)見つからない居場所

アブドゥッラーは、イブラヒム・ヤアコブがマレー人はオラン・アスリのイスラム化のために尽力すべきだと紙面で呼びかけた[52]ことに応答して、イスラム化を助ける活動への参加を志願する手紙を送ったが、返答は得られなかった。また、タイピンで公演していたボレロ劇団[53]で仕事ができないか団長のバフティアル・エフェンディ(Bachtiar Effendi)に声をかけたが、相手にされなかった。三冊目の書籍の原稿として「ジャーナリストのルスタムの生涯」(Riwayat Rustam Journalist)を執筆したが、政治性が強いためにどの出版社も刊行してくれなかった。金を稼ごうと精米所職員、農園労働者、市電の車掌などの仕事にも応募したが、採用されなかったり仕事が想像と違っていたりして就職に至らなかった。

5. 結び

ペンフレンド同盟の集会の呼びかけに誘われて1939年11月にパハンからペナンに移ったアブドゥッラーは、『サハバット』や『サウダラ』の出版の手伝いや、マーキュリー広告代理店の手伝いなどを通じてペナンとその周辺の出版業界に知己を得るとともに、読書会やペンフレンド同盟のワークショップに参加して、同世代の友人や年長者との交流を深めた。二作目の投稿小説が新聞に連載され[54]、二作の小説が書籍として刊行された[55]。

アブドゥッラーは、ペンフレンド同盟がマラヤとボルネオで急速に支持を拡大し、地方のマレー語知識人のネットワーク化が進み、新聞・雑誌のマレー語メディアに活発に発言するようになった時期に、ペンフレンド同盟に誘われるようにしてペナンの出版業界に出入りするようになった。この頃にマレー語メディアは大きな変化を遂げつつあった。アブドゥッラーが北部マラヤで慣れ親しんだようなインド系やインドネシア出身者が混じり合って盛り立ててきた言論界に、シンガポールやクアラルンプールから、マレー人の独立を担うのは「真正のマレー人」であるべきとする考え方が持ち込まれた。これにより、インド系やインドネシア出身者との交流に居場所を見出し、ペンフレンド同盟が掲げてきた「マ

51)イブラヒム・マフムドは、ムハンマド・ユヌスが経営を担当していたときに新聞『デワサ』(隔週刊)の編集を手伝った経験があった。オマル・カンが刊行する『プミンピン・ムラユ』(Pemimpin Melayu、「ムラユの指導者」)で働いた経験もあった。イブラヒム・マフムドの本がペナンでは何冊か刊行されていた。よく知られていたのは『ムスタファ・カマル・アタテュルクとトルコと文明』(Mustafa Kamal Attaturk, dan Turki dan Tammadun)だった。『ワルタ・マラヤ』のサイド・フサイン・アルサゴフはイブラヒム・マフムドの高い編集能力に関心を持ち、ペナンを訪れて彼を連れ帰った。

52)イブラヒム・ヤアコブはこの頃、マラヤ各地を旅行した際の見聞をまとめた著作『祖国を見る』(Melihat Tanah Air、1941年)を発表していた。その中で、パハン内陸のオラン・アスリについて、西洋人やインドネシアから来たバタック人がキリスト教の布教活動を行っている現状を憂うるとともに、マレー人こそが山中に入ってオラン・アスリにイスラム教を宣教すべきであるとし、アブドゥッラーはこれに感銘を受けた。

53)ボレロ劇団は、ダルダネラ劇団の俳優バフティアル・エフェンディと劇作家アンジャル・アスマラによって1936年に設立され、1945年までマラッカを拠点に活動した。バフティアルは1906年西スマトラ・パダン生まれ。無声映画『ニャ・ダシマ』(1932年)を監督したことでオランダ領東インド初の原住民出身映画監督となった。1950年代前半はインドネシアの国営映画会社で映画制作を手掛けた。1950年代半ば以降、PRRI反乱に共鳴し、スカルノ政権への反発から活動の拠点をイタリアに移した。

54)「財産と将来の伴侶は英国に」(Harta dan Jodoh Menanti di England)。筆名はロスラニ・アシキン(Roselani Ashikin)で、1940年1月10日から1940年3月26日まで38回連載された。

55)ジョホール・バルのアニス社に原稿を送って採用され、『彼女は僕の恋人』(Dia… Kekasihku)と『妻の愛』(Kasih Isteri)が刊行された。アブドゥッラーが初めて原稿料を得た著作だった。

レー人の大同団結」という精神に支えられていたアブドゥッラーは、居場所を失っていった。『サハバット』や『サウダラ』の編集部も変容し、別の媒体でペンフレンド・コーナーを開設する試みも成功しなかった。アブドゥッラーはペナンを出てクダに戻り、知り合いの縫物店の仕事を手伝う生活に戻ることになる。

参考文献

タン・マラカ（押川典昭訳）1981『牢獄から牢獄へ Ⅱ タン・マラカ自伝』鹿砦社。

西芳実 2020「アブドゥッラー・フサインの子ども時代：英領期マラヤの覗き見を通じたメディア体験」光成歩・山本博之編著『「カラム」の時代Ⅺ――マレー・イスラム世界の女性と近代』京都大学東南アジア地域研究研究所、pp. 54-60。

山本信人 1995「メダンのロマン・ピチサン：1930年代末インドネシア文化地図と大衆小説をめぐる政治」『法学研究：法律・政治・社会』、68(11)、pp. 147-179。

山本博之2006『脱植民地化とナショナリズム――英領北ボルネオにおける民族形成』東京大学出版会。

Abdullah Hussain. 1985. *Sebuah Perjalanan*. (Edisi Kedua). Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.

Hamedi Mohd. Adnan. 2015. *100 Akhbar Melayu*. Kuala Lumpur: Legasi Press.

Hooker, Virginia Matheson. 2000. *Writing a New Society: Social Change through the Novel in Malay*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

Mohammad Said. 1976. *Sejarah Pers di Sumatera Utara: Dengan Masyarakat yang Dicerminkannya (1885-Maret-1942)*. Medan: Penerbit Waspada.

Reid, Anthony. 1979. *The Blood of the People: Revolution and the End of Traditional Rule in Northern Sumatra*. Kuala Lumpur: Oxford University Press.

Roff, William. 1994. *The Origins of Malay Nationalism*. (2nd edition) Oxford University Press.

Siti Roadziyah Nyan. 2009. *Akhbar Saudara: Pencetus Kesedaran Masyarakat Melayu*. Kuala Lumpur: Dewan Bahasa dan Pustaka.